

住み慣れた地域で、自立した生活を送る

自分らしく生きる

市では、すべての人が住み慣れた地域で、いきいきと生活を送ることができる「共生社会」の実現を目指しています。障がいのあるなしに関わらず手を取りあって過ごしていきましょう。

問合せ 障がい福祉課 ☎ 983・2612



①市役所本館にて出張販売を行うフレンドシップ・イルカの皆さん②③手作りのパンやお菓子、雑貨が並び
④⑤メニューの考案から調理、接客まで自分たちで行っています⑥「サラダバー ばる」で働く2人

12月3日(日)～9日(土)は
障害者週間です

障害者週間は、障がいのない人は障がい者福祉についての理解と関心を深める、障がいのある人は社会に積極的に参加する意欲を高めることを目的としています。

■関連イベント

障がい者施設利用者作品展

とき 11月27日(月)～12月1日(金)
ところ 市役所本館玄関ロビー

障がいのある人
障がいのない人
すべての人が共に生きる

障がいのあるなしに関わらず、いろいろな働き方ができるまちをつくるため、就労継続支援事業所などを支援しています。

就労継続支援事業所では、利用者が自立した生活を営むことができるよう就労の機会を提供し、そのために必要な訓練などを行っています。

その中でも、特定非営利活動法人にじのかけ橋では、今年、新たな取り組みとして、農福連携事業、三島うなぎ野菜の生産を開始しました。

農家の高齢化が進み、耕作放棄地などの増加から、有効に農地を使って欲しいという声が多くあったことも背景にあります。

農福連携の取り組みで 農家は人手不足解消を 障がい者へ働く場を

農福連携は、農家と福祉施設が連携し、農家の人手不足の解消につなげる県内でも珍しい取り組みです。三島市とJA三島函南が共同で推進し、6月には2つの福祉事業所が三島馬鈴薯の収穫作業を行いました。生産者からは「大変助かった」などの好評をいただき、中には、「別の野菜の収穫作業もお願いしたい」という声もあがりました。

現在、農作業の手順を分類し、福祉施設が取り組みやすい形態に整理しています。今後は、福祉施設に広く参加を呼びかけ、障がい者の働く場の拡大と障がい者の賃金上昇を目指していきます。



▲三島馬鈴薯の収穫作業の様子：農家の人に教えてもらいながら作業します

■三島うなぎ野菜の取り組みも始動

三島の名物・うなぎ。観光客の増加に伴い、うなぎの骨や頭など多くの残りが処分されています。その残りを発酵分解させた肥料で栽培した野菜を、新たな三島のブランド「三島うなぎ野菜」として生産しています。

うなぎの肥料には亜鉛やマンガンが多く含まれ、野菜の成長を促し、また甘みが増すと言われています。農薬をあまり使わない栽培もポイントです。「サラダバーばる(北田町)」ではこの野菜を使った料理を楽しむことができます。

今後は、第6次産業化、ブランドの確立も目指しています。



特定非営利活動法人にじのかけ橋

鈴木俊昭さん(理事長):写真左

鈴木涼太さん(法人理事):写真右※

※障がい者就労継続支援B型事業所アルシオン:農福連携事業担当

企業の下請けなどの受注が減ってきていることから、自分たちで新しい仕事を作るべく、市や農協の協力の下、農福連携や三島うなぎ野菜の生産を開始しました。

施設利用者に野菜作りの楽しさを知ってもらうのも目的の一つでした。楽しいと感じることが、仕事に対する誇りにつながり、それが自信や社会へ出る意欲になると思っています。ゆくゆくは一般就労を目指していますからね。

実際に楽しそうに野菜作りを行う利用者を見ていると私たちまで嬉しくなります。

この事業は、三島が発信する農業と連携した障がい者就労体系の新たな仕組みです。今後、事業を全国に広め、農家さんと障がい者の助けになればと思っています。

～三島うなぎ野菜の生産の流れ～

